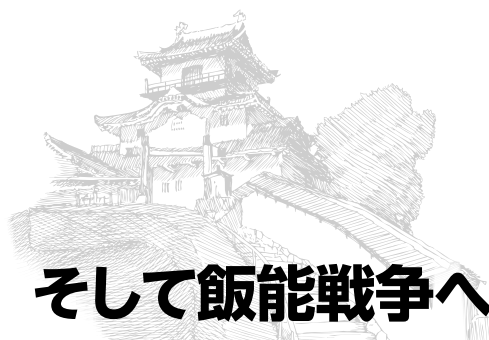


明治維新150周年～武蔵国から埼玉県誕生へ

## 第2回

# 戊辰戦争に対峙する武蔵三藩、そして飯能戦争へ

ぶぎん地域経済研究所 取締役調査事業部長 松本 博之



徳川幕府は、幕閣の首脳たちを集中的に江戸周辺の譜代藩領に配置しました。この典型的な例が、北武蔵の各藩、忍藩、川越藩や岩槻藩でした。“武蔵三藩”と呼ばれたこれらの藩は、多くの老中等を輩出することになりました。

さて慶応4年正月3日、歴史に言う鳥羽・伏見の戦いを契機に戊辰戦争が勃発しました。新政府は、幕府勢力の掃討を目的に東海道、東山道、北陸道の三道から東征軍を編成しました。武蔵・上野へ向かったのは東山道先鋒総督府で、総督に岩倉具定、参謀に板垣退助を据え正月21日に京都を出発し、中山道を進みました。3月6日には神流川を渡り本庄に、そして9日には熊谷へ達しました。

官軍の進攻によって埼玉県域内では、さまざまな混乱がおきました。前号で触れましたが、当時の北武蔵は、本拠地を置く忍藩、川越藩、岩槻藩、岡部藩のほか前橋藩などの藩領、一橋家の飛地領、天領（幕府蔵入地）、旗本知行地が網の目のように複雑に入り組んでおりました。それぞれの領主（各大名や旗本たち）は、官軍が迫りくる短い時間で、勤王か、佐幕か、いずれかに態度を決定せざるを得なかったのです。

本稿では、岡部藩と武蔵三藩である岩槻藩、忍藩、川越藩の順で、それぞれの対応を見ます。後半では、武蔵三藩の戊辰戦争への対応の一つの象徴として、「飯能戦争」と言

われた埼玉県域内で唯一の戊辰戦争での局地戦争についてもふれてみたいと思います。

### 武蔵国を離れた岡部藩

最も素早く時勢に対応を見せたのが、岡部藩であったと言われていています。岡部藩は、武蔵国榛沢郡岡部（現深谷市）にあり、石高は2万石でした。もともと岡部藩安部氏は、武蔵国岡部に陣屋を置く旗本でした。しかしながら本拠としていた武蔵と隣国の上野を合わせても5,000石しかなく、摂津に8,000石、三河に7,000石といういびつな所領形態をとっていたのです。

さて戊辰戦争勃発後の岡部藩の対応はと言いますと、藩主の安部<sup>のぶおき</sup>摂津守信発が病気で、2月26日には東山道ではなく、名古屋にいた東海道先鋒総督府に重臣を代理として出頭させて、勤王の意志を上申させました。

さらに3月8日（9日という史料もあります）には、藩主信発が直接駿府（現・静岡市）の大総督府に勤王誓書を提出し、勅命により上洛をしています。この時に信発は、本拠地を三河半原（現・愛知県新城市）に移すことを嘆願していました。

これらの早い対応が認められ、4月3日には、本拠地を岡部から飛地領のあった三河国半原に移すことに朝廷から許可を得ることができました。いち早く朝臣になると、武蔵国から去っていったのです。

岡部落は幕末の混乱期に藩内での一揆、尊皇攘夷派が暴れるなど動乱に巻き込まれました。藩主信発が、陣屋を武蔵国岡部から三河国半原に移転しようと考えたのは、新しい時代に向かって新しい土地で決意も新たに藩政を行いたいという考えもあったのでしょうか。

### 武蔵三藩でいち早く 官軍入りした岩槻藩

武蔵・上野へ向かったのは東山道先鋒総督府で、正月21日に京都を出発し、中山道を進んできたわけですが、2月中の北武蔵は政治的混乱の状況にありました。岩槻藩内には佐幕、勤王の内部抗争もなく恭順の意を表したと言われていますが、若干の混乱もあったようです。その2年前の慶応2年3月に20歳で家督を継いだ若き藩主、大岡守善正忠貫が、輪王寺宮を奉じて、将軍徳川慶喜の助命嘆願に上京しようとして止められたという史実が残っています。

しかしながら藩としては、ひたすら官軍に恭順の意を表し、官軍が神流川を越えた翌日の3月7日には、藩主忠貫が江戸から岩槻に帰国し、9日には、江戸在府の藩士も全員、岩槻に引き上げさせています。

岩槻藩は、3月9日には官軍側の部隊として、梁田戦争\*に参加しています。その後、3月18日には官軍の指示を受け、岩槻周辺の治安維持のために藩兵25人を出して、官軍の仲間入りとなりました。4月10日には岩倉東山道総督に勤王一途を誓い、藩の総力をもって官軍の力になることを上申しました。武蔵三藩の中でいち早く官軍の仲間入りをするのができたと言って良いでしょう。

\*梁田戦争＝江戸幕府より派遣され、忍城内にいた部隊「徳川衝鋒隊（854人）」と官軍側が下野国梁田宿（現栃木県足利市）で戦ったもの。東日本で最初の戊辰戦争関係での戦いでした。

### 佐幕か、勤王か、揺れる藩論 忍藩

官軍が迫りくる短い時間で、各藩は佐幕か、勤王か、いずれかに態度を決定せざるを得なかったのです。そんな中、最もドラマチックだったのが忍藩でした。

忍藩は、江戸時代に在藩した大名は17名、合計6人の老中を出しています。家康の四男松平忠吉が二代目城主だったこともあり、御三家御三卿に次ぐ家柄で「老中の藩」として、関東でも有力な譜代藩と位置付けられていました。幕末期には天狗党の乱の討伐、水戸浪士の預かり、京都の警衛、その上に品川沖お台場の警備などに忙殺されていました。

慶応3年10月、将軍徳川慶喜が大政奉還の意思を明らかにし、県内の諸藩も大いに動揺しました。当時、忍藩は京都警備を任されていました。藩主松平忠誠は江戸藩邸にいましたが、幕閣より「急ぎ上洛せよ」との命を受け京都へ向かっています。しかし藩主忠誠が京都へ向かう途中に、12月9日王政復古の号令が出され、翌年正月3日に鳥羽・伏見の戦いが起きてしまいました。

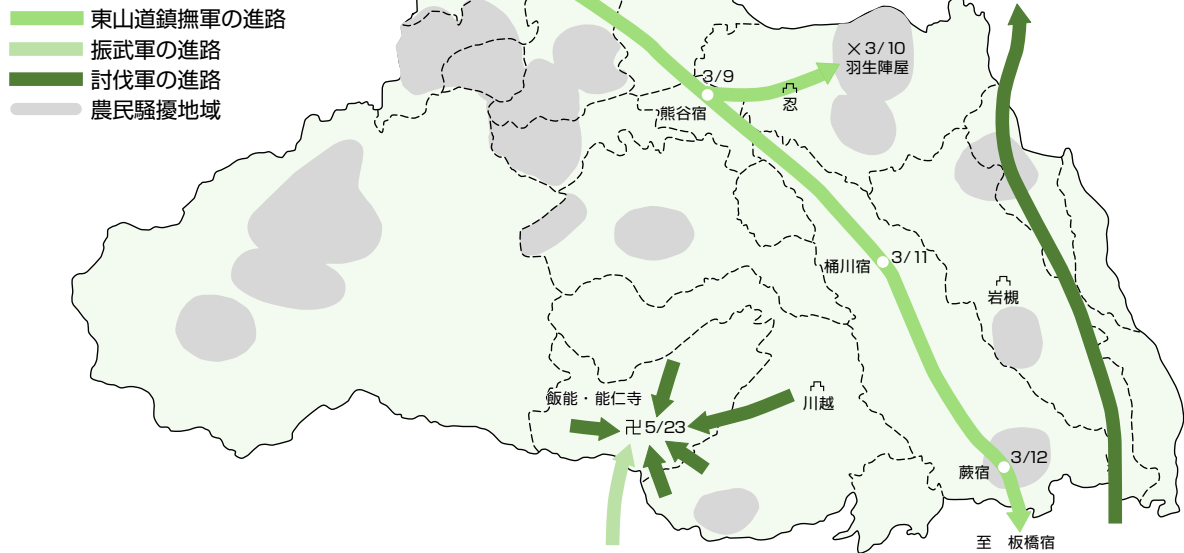
上洛したばかりの忠誠は、いずれの軍にも加わることなく、藩兵たちと一旦、紀州へのがれ、病気のため三河の吉田（豊橋）を経て帰国しています。

さて忍藩は、佐幕か勤王かで、藩論が二分していたと言われています。もともと親藩でもあった忍藩は、そうでなくても官軍からの



現在の忍城

## 戊辰戦争下の県域の騒擾



出所：新編 埼玉県史図録（埼玉県）

心象は悪かったわけです。また京都警備など悪いことは重なるもので、官軍の忍藩への疑念が膨らむようなことが起きていたのです。忍藩は、藩論を統一できずにいましたが、明白な態度を示すための時間はありませんでした。

さらに悪いことに、官軍進攻の直前3月4日に幕府の衝鋒隊（854人）が忍藩を頼って来て、城下に預かるようなかたちとなってしまったのです。忍藩が佐幕派の先鋒であると信じ切って頼って来たと言われていました。実際のところ、忍藩では彼らの扱いには苦慮していました。官軍の先導隊は熊谷宿に入り、“火薬庫となった”衝鋒隊を抱えている忍藩と、一触即発の事態となりました。対応に苦慮した藩は、用人岸嘉右衛門が機転を利かして、金600両と草鞋1,000足を餞として、やっと衝鋒隊を羽生へ追い出しました。官軍側は「忍城、総攻撃」と鼻息荒く、熊谷からの軍使が来たのは、衝鋒隊を追い出した翌日でした。

旧幕府方に与して抗戦するか、新政府軍に恭順するかで、藩内が二分に分裂していましたが、当主の忠誠は、徳川氏の一門であることから、どちらかと言うと「佐幕派」に傾いていたと言われていました。江戸在住の先代忠国は、勤王主義を固く取り、帰藩して大義に従うべきと説こうとするなど、簡単に藩論を一つにまとめることはできませんでした。

“決戦か降伏か”最後の決断となり、そこで一刻の猶予なしとみるや、用人岸嘉右衛門が、「天下の形勢は、忍藩一藩の力では、どうこうすることはできない」ことを力説し、藩論は恭順に至ったと言われていました。

9日、早速、官軍は忍藩に官軍兵食の提供、人馬の輸送、鴻巣や桶川の警備、羽生での一揆鎮圧などを命じます。同じ頃、官軍は、忍城を出た衝鋒隊を下野国梁田（現・栃木県足利市）で打ち破りました。世にいう梁田戦争です。

一難去ってまた一難、官軍は、衝鋒隊を送って行った帰り、羽生近くで休んでいた忍

藩の一隊を見て、「忍藩は幕府方に味方し、官軍に反抗している」と難癖をつけ、即刻戦端を開くと言明してきたのでした。

3月10日に忍城総攻撃が計画されます。弁明も受け入れられず、藩士の切腹をもって官軍はようやく納得し、忍城攻撃を思いとどまり、行田城下を戦火から救うことになりました。

3月11日、官軍の参謀に対して、用人岸嘉右衛門が折衝役となり、誓書をささげるとともに、糧食3,000俵を差し出して官軍に忠誠を誓ったのでした。

帰順後は、忍藩は領内の鎮静化に力を注ぐとともに、官軍の一翼となり、宇都宮、白河、二本松、会津などの諸城の攻略に参加していきました。このような努力によって嫌疑がとかれ、4月6日に上洛が許されました。翌5月には、官軍側として飯能戦争にも加わることになります。

### 幕府最後の老中により朝敵の汚名 川越藩

徳川家康が関東に移封された三河譜代の最古参酒井家の祖・酒井重忠が1万石で入り、川越藩立藩となります。親藩格で、忍藩から移った松平伊豆守信綱、大老格まで昇進した柳沢吉保も輩出しています。幕府は「恩顧四家」体制を敷いて、有力四藩（川越藩、忍藩、彦根藩、会津藩）に江戸湾防衛を負わせていました。

慶応2年10月27日、江戸幕府最後の老中となった松平康英は陸奥棚倉藩（現福島県棚倉町）から入封しました。不幸にも川越藩は、江戸幕府最後の老中を藩主とすることになったのです。このため、「朝敵徳川慶喜に味方するもの」として、早々と近江国にあった約2万石の所領を没収されてしまったのでした。混乱期に老中という要職に就いていたた

めに朝敵の嫌疑を受けてしまったのでした。

実は川越藩は、最初から勤王に傾いていたので、向背の態度を決することは必要なかったのです。討幕親征の詔が下ったのが慶応4年2月3日、直後の5日に康英は老中を辞任し恭順の意をあらわしましたが、これは認められなかったのです。

2月10日には家老小池晋が東山道総督府に出頭して謝罪文を提出し、勤王の心が厚いことを述べて嘆願しましたが取り上げてもらえず、没収された領地は返還されることもなく、朝敵の汚名をはらすことができませんでした。

そこで、3月6日、今度は藩主康英が自ら駿河国藤枝まで赴き、東海道先鋒総督府に面会しました。しかしながら、今度は「上洛が遅い」との難癖をつけられ、「名古屋で待機せよ」という沙汰が下ったのでした。康英は、東山道総督府に協力を申し出るも、なかなか受け入れられず、漸く協力を命じられたのは、3月13日でした。

藩主が不在となった川越藩では、熊谷まで進攻していた官軍から、忍藩、前橋藩などとともに暴徒鎮圧、官軍への兵食供給、人馬輸送などの命が下されていました。官軍金方を命じられ、金3,000両、米3,000俵、薪数100束を献納し、川越城の攻撃を免れたと言われています。この他にも50人の役夫、10,000束の薪の供出も下命されていたのでした。

こうした官軍への協力や藩主からの謝罪文が提出されたことにより4月2日になってようやく朝敵の嫌疑が解かれて、藩主松井康英の上洛が許可されたのでした。

5月3日、ようやく没収されていた近江領2万石が、勤王の実績により総督府から返上が上奏され、8日に戻されました。



## 彰義隊と飯能戦争

慶応4年正月3日、鳥羽・伏見の戦いを契機に始まった戊辰戦争は、明治維新の成立に大きな役割を果たしました。徳川慶喜は、鳥羽・伏見の戦いの後、大坂から海路で江戸へと逃れ、2月11日に新政府へ恭順の意を表すとともに、翌12日には上野寛永寺に蟄居したのです。

江戸では、当時、慶喜の冤罪を雪ぎ、慶喜の誠忠の精神を貫徹しようとする士を集め、事を計ろうとした血気盛んな若い烈士がいました。

2月12日、雑司ヶ谷の酒楼「茗荷屋」に一橋家ゆかりの17名が集まり、寛永寺に謹慎蟄居した慶喜の助命など善後策について話し合ったと言われています。その後の会合では、一橋家の岡部落出身（現深谷市）渋沢成一郎を招き、幕臣以外にも声をかけたため諸藩の藩士や佐幕派の志士も参加することになりました。「命を投げ出して、将軍慶喜の汚名をそそごう」と渋沢成一郎は、決意をしました。23日、浅草本願寺に集まった有志たちは「大義を彰（あきら）かにする」という意味の「彰義隊」を結成しました。

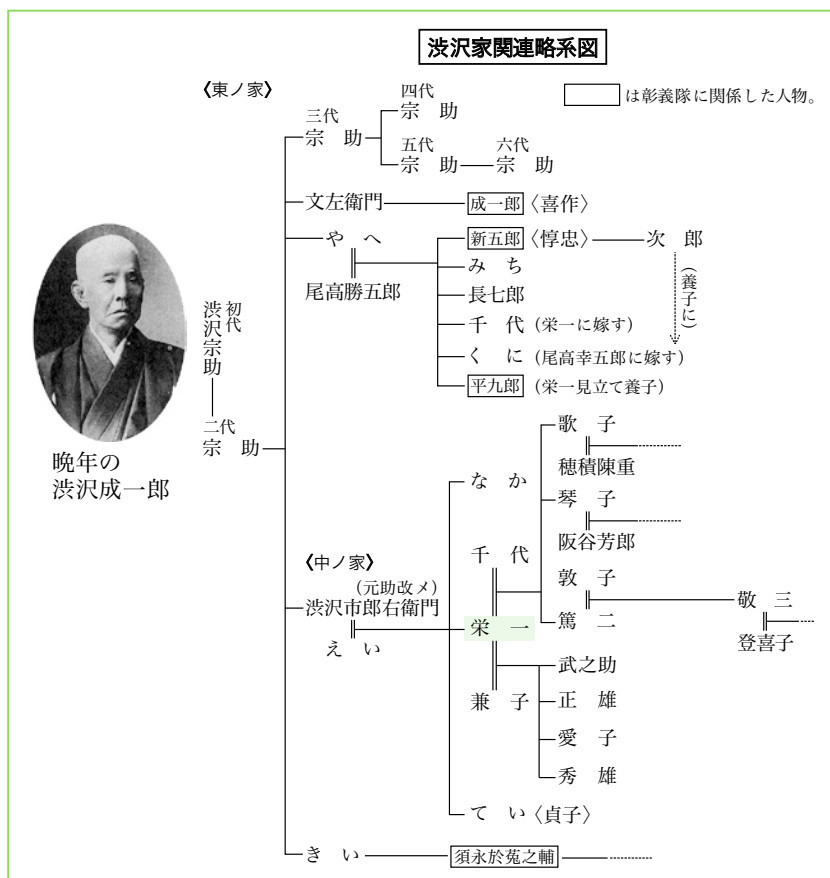
彰義隊に参加した人間、とりわけ幹部たちに武蔵国の人たちも多かったのです。頭取には血洗島（現深谷市）の渋沢成一郎（渋沢栄一の従兄）を選びました。幹事として彰義隊第一の英傑と言われた旧幕府の陸軍調役並の伴門五郎（現蕨市出身）、開戦時の十四番隊隊長は比留間良八（現日高市出身）や主戦論を唱え彰義隊を支援した寛永寺高僧覚王院義観（現朝霞市出身）などがいました。

この中で特筆すべき烈士として語り継がれているのが、伴門五郎でした。彰義隊の主唱者の一人で、慶喜を青天白日の身となすために生涯を捧げた人でした。彰義隊敗北の日に、戦闘の末重傷を負い、自殺する力もなくなり、自ら火中に飛び込み壮絶な最期を遂げたと言われています。享年30歳。

上野戦争の前に実は、彰義隊は幹部の内紛が生じています。「慶喜が江戸を退かれたからには、市中で戦うことは避けよう。江戸の町を灰にするようなことはやめるべきだ。」とする頭取の渋沢成一郎と、「何としても江戸に踏むとどまるべきだ」とする副頭取の天野八郎との全面衝突です。

渋沢成一郎は、彰義隊を離脱することになりました。副頭取天野八郎以下の人々は上野山に残り、成一郎らは袂をわかって、これが「振武軍」となりました。

晩年の渋沢成一郎



出所：各種資料をもとに当研究所作成

## 県内での唯一の局地的な 戦闘となった飯能戦争

渋沢成一郎ら同志100名は、4月28日に青梅街道の西多摩郡田無村（現、西東京市）を本拠としました。新たに同志を集め300名ほどになった振武軍は、頭取が渋沢成一郎、副頭取が尾高淳忠、参謀格が尾高の実弟である渋沢平九郎らで、幹部は榛沢郡（現・深谷市）出身者でありました。

さて、上野に残った天野八郎ら彰義隊はというと、京都の新政府は、彰義隊を討伐する方針を固め、5月15日政府軍は、寛永寺一帯に立てこもる彰義隊を包囲し、総攻撃を行いました。午前中は激戦の中、彰義隊優位で戦況は進みましたが、午後からは佐賀藩のアームストロング砲が火を噴き、圧倒的な人数に勝る政府軍が優勢となり、1日で彰義隊を撃破したのでした。

彰義隊と新政府軍との寛永寺での戦（上野戦争）が始まると、彰義隊と袂を分けた渋沢成一郎らが率いる振武軍も援護に向かいましたが、上野に向かう途中に彰義隊敗北を知ることになり、敗残兵の一部と合流しました。

一時田無にとどまり、官軍に対して最後の戦いをどこですえるべきか議論したそうです。その結果、武州高麗郡飯能の地が攻守によって最適であるとの結論に達し、18日に飯能へ入りました。隊士1,500名に膨れ上がった振武軍は、飯能の羅漢山（天覧山）の麓にある能仁寺で陣営を整えたのでした。観音寺、広渡寺、智観寺、真能寺、玉宝寺の五寺に屯所を置きました。

## 官軍に回った武蔵三藩、 灰塵と化した飯能

5月23日早朝、川越城にいた3,500名の官軍からの総攻撃が始まりました。振武軍の奮

### 渋沢栄一が、もし彰義隊に 参加していたら……

歴史を語るときに、「もし……だったら」は、禁句でしょうが、渋沢栄一の彰義隊参加の可能性について、「彰義隊遺聞」（新潮社刊）のなかで、著者である森まゆみ氏は、「渋沢栄一は日本にいたなら、かなり高い確率で彰義隊の隊列に加わっていたであろう」と書いています。

副隊長であった尾高淳忠は、栄一の従兄にあたり、彼にとって人生の師であり、指導者である存在であったと言えます。

渋沢栄一は後年、「自分が今日あるのは、従兄の淳忠なくしては考えられない」と語っていたそうです。先述の森氏の推察のように栄一が渡仏していなかったら、淳忠について彰義隊に参加、引き続いて振武軍の幹部として飯能戦争で戦っていたことは多に推察できるものです。飯能戦争で戦死していた可能性もあります。人間の運命とは、不思議ですが、これを考えると、明治時代の日本資本主義に発展に寄与した彼の活躍がなかったらと考えると、背筋が寒くなってくるような気がします。

戦むなしく11時頃に、官軍の放った2発の砲弾が能仁寺の本堂の屋根に命中、陣営は猛火に包まれ、午後3時頃には、振武軍は敗退しました。実は、官軍の中には、忍藩や川越藩、岩槻藩の藩士も兵隊として加わっており、後に“飯能戦争”と言われる戦いは、今から考えると“埼玉県域内での県民同士の戦い”となったのでした。飯能戦争は、戊辰戦争の中で県内での唯一の局地的な戦闘でした。

この飯能戦争は、誰が言ったか「江戸城明け渡しの戦争を飯能が引き受けた」というものになってしまいました。本陣となった能仁寺を始め4カ寺は焼け落ち、民家の焼失は、飯能はじめ周辺で合計200戸以上。飯能は焼け野原となり、飯能の人たちにとっては、全く迷惑なものでした。